

言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 ミハイロヴァ・ユリア
論 文 題 目 異文化コミュニケーション場面における「compliment／ほめ」と
ポライトネスの質的研究 ―日本人と欧米人の接触場面を中心に―
学位取得年月日 2009年7月10日

I'm happy I can talk to people from so many countries without a gun.
「こんなにいろいろな国から来た皆さんの前で銃を持たずにお話できることは幸せです」。
赤い頬をしたハンガリー人の学生、一橋大学の留学生歓迎会の席上で

世界では今、経済のグローバル化や科学技術の加速度的な進歩が生じている。それにより、各国の発達や福祉は、世界の状況に大きく影響されるようになった。何千年もの時をかけて発展してきたそれぞれの地域の文化は、今や、大きな釜の中に投げ込まれて、一緒に煮込まれているがごとくである。もはや、様々な文化は、すでに、それらのユニークな環境で発達を続けることができるような、隔絶したものではなくなっている。そして、幸いなことに、題辞に掲げたハンガリー人学生の冗談の通り、今の世界では戦争以外に他の国の人と知り合う方法が劇的に増えてきた。インターネットの普及により、マウスを2、3回クリックするだけで他国のことについて知りたいことを簡単に調べることが可能であり、興味があれば、その国の地理的な特徴、人口や経済などの瑣末で教科書的な情報を読むことだけではなく、有名な歌手が歌っているヒット曲、映画の一部分、テレビの番組、人の写真、自然、文化的な習慣などについてのビデオも見ることができる。50-100年前の人々に比べれば、現代の人々は、観光旅行、ビジネス旅行、留学、外国で仕事をする、国際結婚などが容易にできるし、地球の反対側に住んでいる知人、友人や同僚と連絡することも問題ではない。世界はどんどん小さくなっているのだから、文化間の差は、ますます狭まっているのではないだろうか。

お互いに他国からの影響は、疑いもなく、非常に強い。外国の映画を見ながら、本を読みながら、音楽を聞きながら、そして海外旅行しながら、「あ、世界でこういうこと（もの）があるんだ！ いいね。私の国にもあってほしい」、あるいは「あの国の人々はこういうばかなことをしないよね。私の国でも人々にそうするのをやめさせたほうがいいだろう」あるいは「あの国はすばらしいけれど、何か欠けているものがある。教えてあげようかな（ダンス・料理・音楽等々）」と思うことが珍しくない。世界の国々を見ると、自分の生まれた国や文化では考えられない、いろいろな事例があることに気付く。自分の国（あるいは他の国、全世界）を変えたい気持ちは、多くの人にあるであろう。今の時代に比べると、つい最近までは、他国やその文化と接触す

る可能性は非常に限られていたので、そういうふうに思っていた人はそう多くはなかったはずだ。

文化は人々によって作られているものであるとするならば、これからの世界の発展の成り行きは、異文化との接触、つまりいろいろな国の人々との間のコミュニケーションがうまく行くかどうかということに大きく依存していると確信している。したがって、社会言語学を含め、多くの研究分野は、接触場面¹におけるコミュニケーションの特徴、問題とその解決方法に焦点を合わせるべきである。言語の使い方や文化の違いがどうであれ、その違いに触れざるをえなくなるきっかけは、異文化コミュニケーションの場面にしかないだろう。

Nekvapil, Neustupnyは次のように言っている (*Politeness in Europe, 2005:258*)。

‘However the important question for politeness in Europe is not ‘comparison’ but what actually happens in situations of contact. How are problems interpreted and how do they affect human relations in actual interaction? This is the basic question for sociolinguistic studies of politeness.’ と言っている。

しかしながら、ヨーロッパにおける「politeness」についての重要な論点は、「比較」ではなく、接触場面で実際に何が起きているかということである。現実の相互行為の場において、諸問題はどのように理解され、どのように人間関係に影響するのか。これが、「politeness」に関する社会言語学的研究の基本的な論点である。

残念ながら、この社会言語学的研究の論点についての主張は、Nekvapil, Neustupnyのチェコにおけるポライトネスの特徴についての論文(2005:247-62)の結論部分に置かれており、この論文そのものは、大部分の社会言語学研究と同じように、現実の接触場面の中で生じる問題よりは、文化的差異の問題を中心としている。

接触場面を考えると、‘When in Rome, do as Romans do.’ (郷に入っては郷に従え) という古いことわざが頭の中にすぐ浮かぶかもしれない。つまり、外国へ行ったら、その国の習慣やルールについてどう思っているか、必ずそれに従うべきだと一般的に思われているであろう。しかし、本当にそうであるかどうか、現在の開かれた社会の状況では疑問に思わざるをえない。本稿では、「ポライトネス」と「compliment / ほめ」の分析の上で、欧米人と日本人との接触場面における問題を明らかにし、その解決方法を考察する。

第1章では、本研究と先行研究との結びつき、そして、問題の所在および重要性について述べる。さらに、日本語における「compliment」と「politeness」という概念の等価性 (equivalence) を分

¹ この論文で、「接触場面」とは、会話の参加者がネイティブスピーカーおよび外国人話者 (違う国の人) である場面を指す。それに対して、話し相手が同じ言語話者である場合は「内的場面」と呼ぶ (宮崎里司1999:13)

析する。

第2章では、「グラウンディッド・セオリー」という質的研究法を紹介する。そして、本研究で行われたインタビューの質問とインタビューの例を示す。

第3章では、内的場面と接触場面における「compliment / ほめ」に対する反応を再分析して、結果を「会話的契約」の視点から見たポライトネス論と関連させる。

第4章では、異文化コミュニケーションに起こりえる問題と異文化間の相違を再考する。とくに「compliment / ほめ」として捉えられる表現態度と形式的にパターン化されたお世辞の差を中心とする。

第5章では、グラウンディッド・セオリーを応用した分析の結果（すなわち、異文化コミュニケーションの経験がある人の「politeness」の理解とその「compliment / ほめ」との関係など）を報告する。そして、「politeness」の歴史的な発展ないし変化について論じる。

第6章では、英語などの欧米の言語を習っている日本人の学習者と、日本語を習っている欧米人の学習者に対して、「politeness」と「compliment」を実生活において活用できる指導方法を提案する。

理論的な面から見ると、本研究は「グラウンディッド・セオリー」という質的研究の方法の試みであり、未だ信頼できる研究方法がない中で社会言語学や文化間の研究に選択肢を紹介するものである。実際的な面での価値と言え、本稿は、異なる国の人がコミュニケーションを図る場合に、どのような困難に陥るのか、どのように相手の特徴を捉え、それに合わせて自分の行動を調整すればいいのか、などの円滑な異文化コミュニケーションにかかわる問題を（言語的または非言語的）ポライトネスの視点から示している。なお、ポライトネスは言語・文化別における理論的な現象だけではなくて、実際の異文化コミュニケーションにおけるものとして重視されるべきであることを強調する。

先行研究では、理論的なポライトネス（「ポライトネス」②）の中でのフェイスワークを中心とした論争は、一般的な理解でのポライトネス（「ポライトネス」①）とあまり関係のない抽象的なものになってしまったと主張されている。が、その二つを接近させるべきであろう。つまり、politeness②は、politeness①を対象とする論証的な戦いに関心を持つべきだと思われる（Watts 2003）。本稿は、politeness①（一般的な理解でのポライトネス）とpoliteness②（理論的なポライトネス）を接近させることを目指し、異文化コミュニケーションの経験を持っている一般的な人々が礼儀正しい・丁寧/polite（あるいは礼儀正しくない/impolite）ふるまいをどういうふうに評価や理解するのかという問題を再分析し、新たな「ポライトネス」のグラウンディ

ッド・セオリーを提供する。しかし、そのセオリーは「グラウンディッド（質的データに基づいたもの）」であるので、何らかの複雑な理論の争いから生じた新たな理論ではない。

予想したとおり、一般的なポライトネスの理解の中でバリエーションが出てきた。つまり、人によって「ポライトネス」というのはどういうものなのかという質問に対して唯一の答えはなかった。しかし、すべての見解をまとめるとしたら、一般的な理解の中で、下記のことが見られる。

1) ポライトネスは必ずしも衝突を避けるための社会的なメカニズムではない。現代のポライトネスの見方の基礎となったFTA(face-threatening act)は必ずしもポライトネスの引き金ではない。スムーズなコミュニケーションができてからと言って、その基礎に何らかの衝突とその減少の考慮（衝突を減少しようという考え方）があるとは限らない。多くの人の理解では、「真の’ポライトネス・礼儀・丁寧さ」は

- ✓ 相手のことを考える
 - ✓ 相手に対する配慮する
 - ✓ 相手に興味があること
- という基本的な意図から生じる。

2) ポライトネスには本質的な側面（思いやり、心からの敬意の念に基づいた絶対的なポライトネス）と社会・文化的な側面（形式的なポライトネス）という2つの側面がある。

| <p style="text-align: center;">形式的 (社会・文化的な側面)</p> | <p style="text-align: center;">絶対的 (本質的な側面)</p> |
|---|---|
| <p style="text-align: center;">ルール、適切な言い方 社会規範（心からのものではない） PDHW（ポライトネスには温かみはない） 適切 特定の文化に限定される</p> | <p style="text-align: center;">尊敬の念、思いやりの念 心を込めた言葉や態度・親切であること PDHW（ポライトネスには温かみがある） 親切 特定の文化に限定されない</p> |

3) 言語的なポライトネスは形式的なポライトネスに特有の「マスク」を作るメカニズムとして捉えがちである。その「マスク」という機能を発揮する言語的なポライトネスの使用は文化や言語によって違う程度で現れる。おそらく、その現れ方における相違は異文化コミュニケーションに不愉快を起こすことがある。

「形式的」と「絶対的」のポライトネスの側面間のバランスが、文化と歴史的な時期によって、大きく異なる。5.4.2で見たように、世界中、歴史の流れとともにインフォーマリティーへのスイッチ（言い換えれば、形式的なポライトネスの減衰）は普遍的であるようだが、各国は異なるペースで発展している。それに比して、現在、日本の文化で形式的なポライトネスの要求はより厳しく、欧米の文化ではより柔らか（インフォーマル）であると言える。

- ✓ 「スウェーデンではいつも尊敬の念を表す必要がないけど、それは感じられる。日本では常に尊敬を示さなければいけない。」 (O-26)
- ✓ 「私の理解では「ポライトネス」は友好的であることであるが、日本では「ポライトネス」は適切であることである。」 (O-9)
- ✓ 「ポライトネス」は心から他人に対して親切であることである。日本人はけっこう慇懃無礼である。 (O-24)
- ✓ ポライトネスには義務感はない。それは自然な感情（‘いい’感情）の表れである。しかし、日本では文化のせいで義務感を伴っている。 (O-8)

上記のような意見は、日本人と長く接触した経験がある欧米人にとって典型的な意見である。おそらく、「思いやり」というキーワードになった日本文化は、上記のようなイメージとは合わないと思われる。しかし、残念ながら、欧米人にとって日本人はよく誠意がなく見えるし、そして言っていることと思っていることが食い違っているようにも見える。

疑いもなく、日本人の間でも、相手のことを大切にして、他人の気持ちになって、相手に対して配慮する人がたくさんいる。筆者は来日したとき、この日本の社会生活の側面に非常に感心した。日本人の回答者の中で「本当の礼儀は私が「sincere」なものだと思う。」 (N-11) / 「丁寧さは思い遣りとか、相手の気持ちを理解することだ」 (N-14) / 「大切な気持ちがあれば、自然に丁寧にできるし... (N-19)」のような意見は珍しくないから、ポライトネスの理解の中で欧米人と日本人の間にあまり違いがないと言える。しかし、欧米人にとって、何らかの理由で、日本のポライトネスには誠意がなかなか感じられない。おそらく、日本における形式的・言語的なポライトネスの複雑さがその一つの理由であるかもしれない。上記のように、欧米の国はポライトネスのインフォーマリティーへの変化は日本よりずっとはやい。最近、ある欧米の言語、例えば、エストニア語²とハンガリー語³の中でTの二人称の代名詞の使用は、目上の人に対しても高まっている。スウェーデン語とフィンランド語では尊重の‘you’(V)の形はほとんど使用されなくなった。そのため、他の国で形式的なポライトネスの側面が強ければ強いほど、欧米人にとって誠意がな

² Keevalik, L. (2005) Politeness in Estonia: a matter-of-fact style. In Leo Hickey and Miranda Stewart (eds) *Politeness in Europe*, Multilingual Matters Ltd (p.206)

³ Bencze, L. (2005) Politeness in Hungary: uncertainty in a changing society. In Leo Hickey and Miranda Stewart *Politeness in Europe*, Multilingual Matters Ltd (p.242)

いように受け取られる可能性が高い。

現在、世界中で見られる非フォーマリティーへのスイッチは無礼への後戻りとは違うものだと考えた方がいい。非フォーマリティーは野蛮なふるまいではなくて、相手に対して敬意・思いやり・**friendliness**などの本質的なポライトネスを伝えるためにより多い選択の余地を残すやり方である。人々の一般的な教養が高まれば高まるほど、形式的なポライトネスの重要性が下がってくるだろう。

なお、欧米人と日本人とのコミュニケーションの中でその二つのことが問題になりやすいと言えよう。

- 1) 外国人の相手が絶対的なポライトネスを形式で捉える
- 2) 外国人の相手が形式的なポライトネスを本音だと思ってしまう

本研究では、「**compliment**/ お世辞・ほめ」の分析に基づいて、この問題に注目したが、他の言語と非言語行動（発話行為）においても同じようなコミュニケーションブレイクダウン・不愉快を感じることもあり得るに違いない。

「ポライトネス」は「誠意」と共存できるのか、という問題は先行研究でよく出てくるが、筆者は本研究をはじめたとき、この問題に焦点を当てるつもりはなかった。しかし、インタビューの分析過程で分かったことは、日本人の回答者から見ても、欧米人の回答者の意見から見ても、日本文化の中では、誠実さに欠ける‘**fake compliments**’、いわゆる「お世辞」が欧米よりずっと多いし、形式的なポライトネスの一部になってしまったようだ。ある欧米人の回答者が言ったとおり、日本では「**compliment**」は新しいウインドウズ・ビスタに組み込まれている季節のあいさつと同じようなものである。すべての表現は決まっているから、それをクリックして、必要などころに入れるだけだ。

欧米人は礼儀（社交辞令）としての「お世辞」の文化に対して抵抗があるのをよく感じた。それはなぜかと言うと、欧米でも‘**fake compliments**’があることはあるが（ただし、欧米の国の間にも「お世辞」の程度が大きく異なる、4.4.3参照）、すべての欧米人の回答者によって日本より頻度は少ないと感じられている。特に相手が外国人である場合に、日本人は定型的なほめ方を過剰にするだろう。欧米人の日本語能力がどうであれ、とにかく「日本語が上手」と言う。（学会の直後、「ほめ」を研究している日本人でさえも、外国人の留学生に道を聞かれて、外国人なまりを感じるや、反射的に「日本語がお上手ですね」と言ってしまうこともある！）外国人が日本に10年以上住んだ経験があるということを知っていても、不思議に「箸が上手」と言わざるを得ない。そういうような決まった言い方は、欧米人にネガティブな感じを起こさせることが非常に多い。それ以外にも、外見のこと、「目が青い」とか「鼻が高い」とか「足が長い」とか、つまり生まれつきの外見のことは日本人によく言われるが、欧米人はお互いをそういうことについて

てほとんどほめない、「あ、その人がきれい」と気づいていても、生まれつきの外見のことを話題にしない。もし毎日そういうことを言われたら、困ってしまう。先生にさえクラスでやった発表などについて形式的にほめられると、O-9の回答者がよく表した気持ちになるのは珍しくないだろう。「日本人はお世辞を言ったら、相手の感じを気にしないの？相手のことを考えないの？」

「ほめ・お世辞」の目的は、基本的に、「良好な人間関係を作り出すか維持すること」だと言われているが(川口他 1996:20)、それは接触場面では、残念ながら、多くのケースで通じないようだ。

欧米人は日本に来たら「お世辞」の文化に必然的にぶつかるので、「日本人の「ポライトネス」には誠意がない」という捉え方からネガティブな感情や誤解が生じることを予防するために、教育場面で「お世辞」について何らかのやりかたで説明する必要がある。「お世辞」はいいか悪いかではなく、相手の意図や文化的な習慣などを学習者に納得させれば、効果がある。「日本語がお上手ですね」というのは<compliment>ではなく、外国人に向かった**挨拶として**紹介したほうがいい。日本人の中でもお世辞が嫌いな人々がたくさんいるに違いないけれども、自分の文化であるので、相手の意図を推測することができるし、もし、欧米人にお世辞を言われても、あまり気付かない、気にしないだろう。すくなくとも、筆者は日本人の回答者から、「欧米人にお世辞をよく言われて困ったことがある」という経験について聞いたことがない。逆に、大部分の日本人の回答者が「欧米人は本当のことを言う。だから、すごく気分がいいですね、いわれて…」と話してくれた。おそらく、英語と他の欧米の言語を勉強している日本人の学習者に、お世辞に聞こえないようなほめ方に関して指導するのが望ましい(第6章参照)。

社会言語学研究で、異文化間の相違論を固守しようとする学者は、何よりも欧米文化と日本文化における「compliment/ ほめ」に対する反応のパターンを対立させている。本論で示したとおり、日本人は「ほめ」に対して「いいえ、とんでもない。」「そんなことはないです」などという否定的な反応をするのに対して、欧米人は<compliment>を言われた場合に“Thank you”と答えるというのが、教師にも学生にもある一般的な思い込みだが、実は両方の文化圏で「ありがとう」という返答は、基本的な「ありがとう」の意味、すなわち**感謝を表すこと**のために使われている。そして、欧米人にとっても、言われた「compliment / ほめ」をダウンプレイ・否定することも当然な戦略であると分かった。会話のなかで「compliment / ほめ」の表現に出会ったとき、日本人も欧米人も以下のようなジレンマに陥る。

Don't completely ignore the person/express gratitude ⇔ **but don't completely acknowledge**
相手を無視しないこと / 感謝すること ⇔ 言われたことを完全に認めないこと

非常に多くの人には上記の「欧米人がcomplimentを受け入れるのに対して、日本人は受け入れない」というステレオタイプに感化されていると言える。一方、長い間日本に住んだ経験のある多

くの欧米人は、日本人も友達や親戚にほめられたら、素直に「ありがとう」と答えることが当然であるという事実になかなか気付かないようだ。もう一方は、欧米の国に長く住んだことがある日本人も、欧米人が必ず「compliment」を受け入れると思っている。実は、「compliment」の場合だけではなくて、だいたい欧米の文化の中で「謙遜」という概念は欧米人に分からないものと確信している日本人が多い。だが、欧米の国でも、謙遜の原則は、日本と同様に社会行動の基礎にくみ込まれている。アメリカ人のほうがヨーロッパの人より積極的な考え方を多少強くもっているかもしれないが(O-27 'It must be easier for an American to admit he's good at something than for a Swedish)、自分のことをよく言うのはどこでもタブーであり、常識外れだと思われている。しかし、違いを言うと、欧米人のほうから見れば、日本の「謙遜」の表わし方は、例えば、「compliment / ほめ」の場合に、「ああ、すてき、すてき！」－「いいえ、いいえ、とんでもございません」－「とてもきれいですよ」－「いいえ、いいえ、そんなことはありません」－「きれい、きれい」－「いいえ、いいえ」(つづき)というスクリプトは、芝居のように非常に空々しい雰囲気を持っている。'It's over the top here(O-25)' / 'I feel like a kid in a kindergarten following their politeness scripts so that they could feel comfortable(O-12)'などのような欧米人の意見は注目に値するだろう。欧米人に台本を覚えることを教えるなら、まず、どうしてそういう台本を覚えるべきであるか説明するべきである。(欧米人はある台本に従うべきときに、日本人が台本がないときと同じほど困る。)

なお、日本人は「compliment」に出会ったとき、「そんなことない」と言うときは、それはひたすら謙遜を表しているのだろうか、と疑問に思わざるを得ない。行った研究の上で、実際は、言われたことがほとんどお世辞で中身がないということを理解した上で、「そんなことない」と言っているのではないだろうか。つまり、「そんなことない」という文句は、文化的に作られた「お世辞」に対する自己保護を表わすのではないだろうか。特に正式な場面では、お世辞に聞こえる典型的なほめ方が多いために、「そんなことない」と言うのが常識にさえなっているが、友達や親せきに褒められたら、「そんなことない」という答えの頻度がずっと少ない。おそらく、明らかに、言われていることは「お世辞」である場合に、「そんなことない」という返答は極めて論理的だと思う。

筆者はロシア人(欧米人)であるから、おそらく、日本人が出会うトラブルより、欧米人が日本人と接触する際に生ずる困難のほうを、よりよく見せられているようである。日本人が感じている不愉快をより明らかにするために、同じような問題は、日本人の研究者によって分析されるのが望ましい。本研究では取り上げられた問題とその解決方法の考察は社会言語学、異文化コミュニケーション研究、外国語教授法などに応用できる以外に、日常的に外国人と接触する一般的な人々にとっても興味あることと考えられる。

今後の問題として、「グラウンディッド・セオリー」という研究方法を使いながら、その適用領域を向上させることを目指して、接触場面における問題やポライトネスにかかわる不快感を研究しつづけたいと思う。その上で、言語教育に新たな発見を導入する。